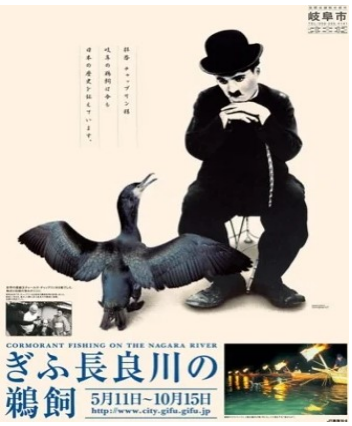
皆様お元気でお過ごしでしょうか。
首都圏同窓会副会長の長谷川です。
コロナ禍の中、すでに 3 年続けて首都圏同窓会の総会・懇親会が出来ない状態が続いています。
会員の皆様との絆を絶やさぬよう、首都圏同窓会独自のホームページを作成し情報交換させていただいておりますが、やはり皆様のお顔を拝見しながら会話を楽しむ機会が一日でも早く訪れないか、待ち遠しい限りです。
さて、そのホームページに今回紹介させていただきますのは、本年 10 月 10 日～11 日に歴史探訪として旅して来ました長良川の鵜飼と岐阜城の紹介です。
この旅行を企画してくれたのは瑞浪高校 OB で瑞浪・多治見在住の同級生男女 7 名（平野靖久さん、加藤明康さん、高木義文さん、山内美保子さん、渡辺一恵さん、今井由美子さん、井篦礼子さん）で、首都圏同窓会からは伊藤一徳会長と私、そして古事記の世界から現代史に至るまで歴史大好き人間の倉本一平さんが参加しました。

長良川鵜飼ミュージアム

最初に訪問したのは「長良川鵜飼ミュージアム」です。
この施設は、岐阜市が鵜飼の文化遺産を内外に発信する拠点として平成 24 年 8 月に建設したもので、館内に入ると 1 階には鵜匠の紹介や鵜の生態などが紹介され、2 階には鵜飼の歴史や鵜飼をこよなく愛した「織田信長、徳川家康、松尾芭蕉、明治天皇、チャップリン」の逸話など、1300 年の歴史と伝統が考察出来る貴重な資料が、多数展示してありました。
その中で興味を引いたのは、チャップリンが鵜飼見物したエピソードです。
以前新聞か雑誌で、チャップリンが 2 度鵜飼を見物し、1 度目は鵜匠をアーティストと称賛し「ワンダフル」を連発するほど絶賛しましたが、2 度目は変わり果てた鵜飼の姿に落胆したという記事を読んだことがあったからです。

チャップリンが 1961 年 7 月の 2 度目の鵜飼見物でなぜ落胆してしまったのか、その原因は何だったのか、早速スマホで「チャップリンと長良川鵜飼」を検索してみました。
すると、1961 年 7 月 27 日の朝日新聞朝刊の記事が出て来ました。
チャップリンが長良川のホテルで夫人に語った言葉です。
「戦前の鵜飼はこんなに派手で雑然としていなかった。夜の闇がもっと美しかった。
真っ暗な川かみから等しい間隔を置いて、ポツン、ポツンと鵜舟の篝火があらわれてくる。
その情景はみごとな芸術家の演出の腕前を思わせた」。
チャップリンが 1 度目に鵜飼を見物したのは 1936 年 5 月、日本では二・二六事件が起きた年です。
その頃の日本は軍国主義が台頭し、中国との戦争の影響で庶民の生活が困窮し始めた時期です。
チャップリンが見た長良川の夜景は、街の明かりはまばらで鵜飼の行われる一帯は深い闇に包まれ、鵜舟の篝火（かがりび）だけが幻想的に目に入って来たのではないかと思います。
しかも新婚旅行を兼ねたお忍び旅行だったため、一般の観光客にはチャップリンの存在など知る由もなかったでしょう。
しかし 2 度目の 1961 年 7 月の日本は、戦前とは違い高度経済成長期に入っていました。
長良川周辺の光景は戦前とは変化して旅館群は近代化され、明かりは煌々と灯り、観覧客の賑わいは 25 年前とは比べ物にならなかったのではないでしょうか。
チャップリンが落胆した真の理由は、おそらく鵜飼を見に来たお客様がチャップリンの姿を発見して大騒ぎになり、それで気分を害してしまったのではないかと思います。
その証拠にチャップリンが鵜飼見物を終えた帰り際に、お客さんに手を振りながら「今夜の私は、まるでさらし者だった」と話したそうです。



このポスターは 1961 年来日した際のモノ

鵜飼

鵜飼ミュージアムを見学した後は宿泊する「十八楼」にチェックインし、温泉に浸かり夕

食を済ませて 19 時発の観覧船「清風丸」に乗り込みました。
鵜飼見物の流れは、乗船、出船、鵜飼開始、付け見せ、総がらみ、下船です。
先ずは鵜飼の観覧ポイントへ船頭さんが船を運び、川岸に停泊して開始を告げる花火を待ちます。
花火が打ち上がると、いよいよ鵜飼の始まりです。
花火の合図と共に船首に篝火をつけた鵜舟が、川上からやって来ます。
一艘の鵜舟には宮内庁式部職の鵜匠と舟を漕ぐ艫乗り（とものり）、二人をエスコートする中乗りが乗っていて、６艘の鵜舟が観覧船に近づき並走しながら川を下ります。
そして、一旦舟を停泊させて、観覧船のお客様に鵜飼の技を目の前で披露します。
この演出を付け見せと呼んでいます。
鵜匠は 10～12 羽の鵜を繋いだ手綱を絡ませないよう操り、鮎を捕えた鵜をタイミング良く舟に引き上げて吐き出させます。
その間、他の鵜は川中を自由に泳ぎ回りますが、手綱が絡まないように捌きながら篝火に薪を補充し、忙しい作業を何度も繰り返しながら鮎を捕獲していきます。

付け見せ

「付け見せ」の所要時間は 20 分ほどだったと思いますが、その迫力に圧倒され、あっという間の出来事だった気がします。
そして最後に ６ 隻の鵜舟が一旦観光船から離れて川上に上り、川幅いっぱいに横一列になって一斉に鮎を浅瀬に追い込む「総がらみ」が展開されます。
艫乗りが船縁を舵棒で「ドン！ドン！」と叩き、水中の鮎を脅しながら舟が進みます。
そして鵜匠たちは「ホウホウ」と鵜に掛け声をかけて励まし、鮎を川岸まで追い込んで一網打尽に鵜が鮎を捕獲します。
その迫力のある演出はお客様の名残を惜しむ拍手を誘い、余韻を残したまま鵜飼の幕が降

ろされます。

総がらみ

鵜飼のクライマックス「総がらみ」が終わると下船です。
鵜飼の余韻に浸りながら旅館に帰る道すがら、時代劇の衣装に扮したカップルに遭遇し、無理を言って一緒に写真を撮らせて頂きました。その時何故か昼間長良川鵜飼ミュージアムで見た芭蕉の句「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」を思い出していました。

岐阜大仏「正法寺」
翌日はすっきり晴れ上がった秋日和。
爽やかな秋空の下を散策しながら、岐阜市大仏町にある黄檗宗（おうばくしゅう）の正法寺に参拝しました。

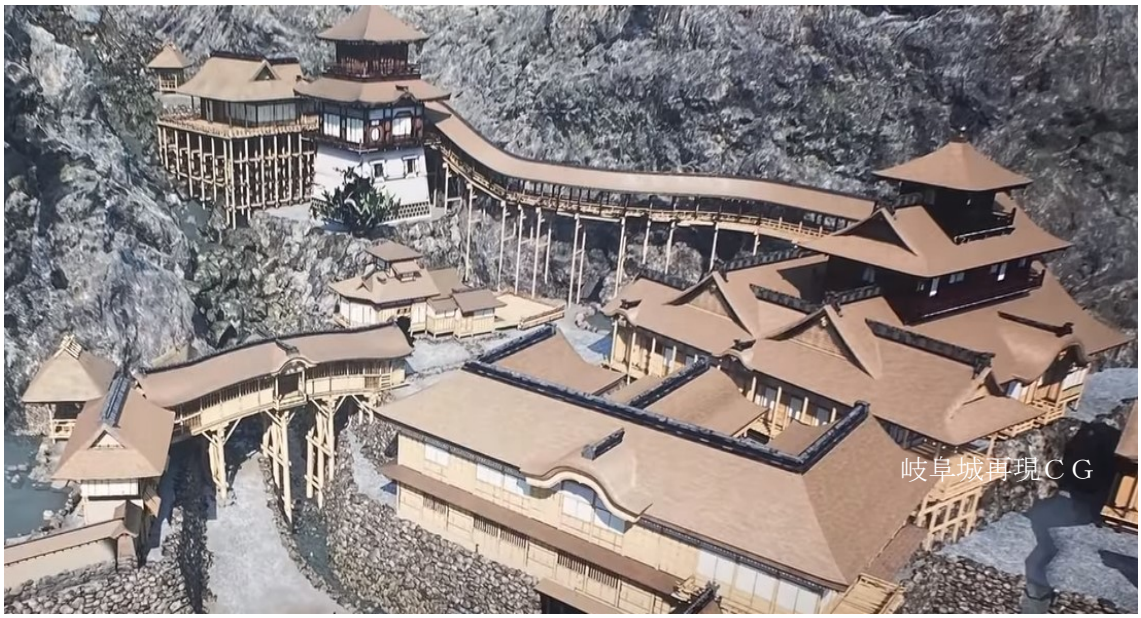
正法寺

岐阜大仏

正法寺と言えば本尊の釈迦如来の大仏が有名で、像高は 13.7m もあり雄大でした。
奈良大仏（像高 14.7m）や鎌倉大仏（像高 11.4m）と並ぶ日本三大仏の一つとも言われています。
正法寺は 1692 年千呆和尚により、黄檗宗の寺院として開山。
大仏は、1832 年肯宗和尚により完成しました。
一見の価値ある大仏ですので、岐阜市内にお越しの節は是非お立ち寄りください。

岐阜城

次に訪れたのは岐阜城です。
標高 329mの金華山の頂上に建てられた岐阜城は、戦国時代国盗り物語で知られる斎藤道三が整備し居城にしたと言われています。
金華山の麓から山頂まではロープウェーを利用し、そこからお城までは石段や坂のある山道を 15 分ほど徒歩で登らなくてはなりません。
70 歳を超えて衰えた足腰に鞭うって、やっとの思いでたどり着いた岐阜城でしたが、その入り口には入場料 250 円の表示。
小銭入れから硬貨を出そうとしていると、仲間から 70 歳以上は無料とのアドバイス。
健康保険証を見せて中に入ると、１階は信長が整備した城下町づくりや治世の紹介、２階は信長の城づくりに掛ける強い思いが紹介され、３階には岐阜の繁栄や世界に目を向けた信長の先見性が顕彰されていました。そして４階は天守閣で濃尾平野が一望出来ました。
この岐阜城は昭和 31 年 7 月に鉄筋コンクリート造りで復元されましたが、本来の天守とは形の異なる「模擬天守」です。
では本物の天守はいったいどんなモノだったのか？その答えは城内にありました。
それはリアルに描かれた再現ＣＧです。



そのＣＧを見ると山麓の居城は巨大な石垣の中に華麗な建築物が並び、当時ポルトガルからやってきたルイスフロイスが京の金閣寺を凌ぐ建物だと絶賛したようです。
近年、信長の館跡が見つかり、当時の栄華を誇る華やかな陶磁器や瓦などが多数発掘され、信長の偉大さが解き明かされて来たようです。
また、城内にある地球儀も当時ポルトガルの宣教師が持ち込んだものでしたが、信長はこれを見て、明（中国）征服の夢を見ていたかも知れません。
来たる 11 月 5 日（土）～6 日（日）に「岐阜信長まつり」が開催され、信長に扮する木村拓哉さんと福永平太郎貞家に扮する伊藤英明さんが信長公騎馬武者行列とトークイベントに参加するということで、岐阜市内は今、大変な盛り上がりを見せています。

おわりに

今回の歴史探訪は、岐阜県に生まれ育ちながら長良川の鵜飼や岐阜城に一度も行ったことのない者同士でしたので、偉大な郷土の歴史に触れる貴重な体験が出来、参加者一同大満足致しました。
なお、宿としてお世話になりました長良川温泉「十八楼」のコロナ対策を始め、送迎サービスなど申し分ないもてなしに、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

2022 年 10 月 31 日著

参加者　　奥 3 列左から平野、伊藤、長谷川　中央左から今井、山内、高木
前列左から加藤、渡辺、井筧、倉本